

**【研究ノート】**

**環境の寓話  
蟻ンコ／庭木たち**

**増 田 辰 良**

## 研究ノート

## 環境の寓話 蟻ンコ／庭木たち

増田辰良

## 目次

- 一・蟻ンコ  
付記  
参考文献  
二・庭木たち  
付記  
参考文献

## 一・蟻ンコ

「えっさえっさ。それ、山を登るぞ！ 離すなよ。えっさえっさ。次は谷だ！」

「兄ちゃん。昨日は谷なんて、なかったよねえ。その先には大きな石ころや枯れ草の山もある。迂回しようよ！」

「いや、このまま前進だ。気をつけろ。油断するなよ。静かに、かつ速やかに運ぶのだ」

「やっぱ、干乾びたミミズは軽いつすねえ。でも山や谷、石ころがなければ、楽な作業なんだけどねえ。ずーっと喰らいついたままなので、口の筋肉の感覚がなくなっちゃたあ」

「文句を言うな。こんなお宝は久しぶりじゃないか。大根の林を抜け

るぞ。ここを抜ければ、うんと近道だ」

兄ちゃん蟻は弟蟻を励まします。

「でも兄ちゃん、大丈夫かい？ 賊は視界の悪いところに潜んでるんじゃないの？ 近ごろ、よく出るって噂だよお」

「だから急ぐのだ。いいか、静かに、かつ速やかに運ぶのだ。速やかに。これが大事だ。何があろうと、女王様に献上するのだ」

と、そこへ行く手を阻む邪魔ものが現れます。

「おっと！ 待った！ その不法侵入蟻ンコめ。聞こえないのか？ 待ちやがれ！」

「ありあ、出ちやたあよー。ドスのきいた声。あの鬼のような顔つき。間違いなく賊だよ。だから言っただろ。もう手遅れだあ」

弟蟻は震えています。

「やい、やい！ そのお宝をそっくり置いて行きな。嫌だとは言わせないじえ」

「だれが渡すものか。さあ、急いで逃げるのだ。お宝を離しちゃだめだぞ。しつかり銜えてる。死んでも離すなよ！」

兄ちゃん蟻は弟蟻を鼓舞します。

キーワード：環境、蟻、静脈（動脈）産業、庭木たち

「まあまあ……まあ待ちやがれ！ 俺様を誰だと思ってる？ 泣く子も黙る蟻ンコの中の蟻ンコ、蟻ンコ賊の頭だあー。よく、覚えとけ！」

「知ってますよ。噂は、よく、お聞きしてます。みんなのお宝を横取りする悪い、悪くいヤツですよ。蟻の風上には決して置けない、極悪非道な蟻ンコ賊。さすがに子分も悪そうな面をしますねえ。そのうえみんな不細工ときた。こりゃあひどい。オーディションで選んだのですか？ ちなみに倍率は？」

弟蟻は怖さの裏返しでさかんにちゃかします。

「極悪非道な蟻ンコ賊だと、そう褒められると照れるなあ。へっへっへっ。おっと、その手には乗らないぜ。お宝を置いて、とつとつとつせやがれ！」

お頭は睨みつけます。

「そうは問屋が卸さない。差しあげるわけにはまいりません。冬籠りのための食料になりますからね。これ、大きいですよ。ブルーベリーの木の下で見つけたのですよ。久しぶりの大物、お宝です。巢へ持って帰って、女王様に献上した後で、許可をもらって仲間たちとちよつとだけ食べるのですから。だから、あげない！」

弟蟻は勇気を出して大きな声で返します。

「じゃあ、しょうがねえ。力づくでいただくまでよ。痛い目にあいたいのだな。野郎ども、やっちまええ！」

いっせいに、子分蟻たちが兄弟蟻を取り囲み、ミミズに喰らいつきます。

「いいえ、渡しません！」

「決して、渡せません！」

蟻ンコ兄弟とお頭の子分たちは一匹の干乾びたミミズを左右に分かれて引つ張り合いはじめました。どうも見たところ同じ種類の蟻の

ようですが、縄張りというか巢穴というか、女王蟻が違うために自分たちを仲間だとは思っていないようです。

蟻たちがキスをしている光景をよくみかけますよね。あれって敵でないかどうかを確認しあっているのでしょうか。そして蟻はどれも勤勉かつ実直かと思っていました。なかにはお宝を横取りするような輩もいるのですね。

兄弟が離そうとしないのを見て賊のお頭も加担します。

「堪忍袋の緒が切れた！ やい、離せ！ ぶつ飛ばすぞ！ 一発、くらわずぞ！」

「どうされようと離すものですか。これは私たちのお宝です。ここへ来るまでに山越え谷越え、とても大変な苦勞をしましたから。スギナの森、露草の茂みを抜け、ドクダミの匂いにも堪え忍び、そりや、もう命がけでしたから。絶対に渡すわけにはまいりません。これを女王様に差しあげて、褒めてもらおうのです。はい」

兄ちゃん蟻はきつぱりと断ります。

「そんな苦勞がどうした。俺様の知ったこっちゃない。俺様のなわばり内を通るものはちっこい蟬一匹といえども容赦はしない。通してやる代わりに、お宝を置いて行け！」

お頭はさらにドスの効いた声で脅します。

干乾びたミミズは右へ引つ張られたり、左へ引つ張られたりするものですから、いまにも切れてしまいそうです。

とそのとき、突然、空が暗くなってきました。人間の靴底が迫ってきているのです。サイズは二十五・五です。争っている場合ではありません。逃げなければ、踏み潰されてしまいます。先日も巢穴の近くで多くの仲間たちが殺戮にあいました。スリッパのつま先で押しつぶされたのです。あの日は気温が低く、仲間の動作は鈍っていました。



「差しあげるわけにはまいりません。あなたも蟻の端くれならば、ご自分でお宝を手に入れればいいでしょう」

兄ちゃん蟻は声を震わせ、お頭のドロンと濁にごった目を見て言い放ちます。

「ようよう、俺様に意見をしようつてののか？ いい度胸だぜ。でもなあ、怪我をしたくなかったら、おとなしく言うことを聞くんだな、ええ。そっちの草食系のお兄さんはどうなんだ。俺たちと時間無制限一本勝負をしたいのかあ。多勢に無勢だ。あきらめろ！」

その言葉をかわすように弟蟻は言います。

「ところで、お頭さん、さっき靴底攻撃を受けたとき、あんなに遠くまで逃げていたのですね。悪党だけあってさすがに逃げ足は速いですねえ。あの後、わたしたちは水攻め攻撃も受けたのですから……。あくあ、何てこったあ。今日は往復ビンタをくらったようだよ」

「逃げ足が速いと。そんなに褒めるなって。へっへっへっ。おお、おだてに乗せられちゃあいけない、いけない。お宝をよこすのか、よこさないのか、二つに一つだ！ さあどっちだ！ これがファイナルアンサーだ。よく、考えろ！」

お頭は目を剥いて怒鳴りつけます。

「そんなに欲しいですか？」

兄ちゃん蟻はお頭を睨みつけ、しらっと訊き返します。

「当たり前よ。これが俺様の商売だからな。へっへっへっ」

「じゃあ、相談する時間を少しく下さいよ」

「いつするか？」

「今でしょ！ とにかく持って帰るべきものですからね。お頭もご存知のとおり、わたしたち働き蟻は本能で喰らい付いたものを巣に運び込むという行動以外に選択肢はないのですよ。生まれてから、ずっと

(四)

運び続けています。これは自然の摂理ですから、自分たちで変えようがないのです。はい」

「つべこべ言わずに、早いとこ相談しろ。お宝をよこすのか、よこさないのか、二つに一つだつて言つてるだろうがあ！」

お頭はまた声を荒げます。

さあ、困りました。蟻ンコ兄弟は小さすぎる脳ミソで一生涯、考えます。考えすぎて頭あたまが痛くなつてきます。立ち眩くらみもしはじめます。それもそうです。これまで何かを真剣に考えたことがないので、考える必要のない人生を過ごしてきましたから。生まれながらしてお宝を探し、巣へ持って帰るといふ社会性しか身につけていませんから。そのお宝を女王様以外の蟻に差し出すか否か、という選択などしたことがありません。でも、今は選択を迫られています。

「兄ちゃん。お頭がイラついた顔してこつちを睨みつけてるよ。どうする？ このまま差し出しちゃう？」

「いや、そんなことはできない。そんなヤツは蟻ンコの風下かざしもに置かれちゃう。考えても考えても、脳ミソにはお宝を巣に運び込んで自分の姿しか浮かばない」

「そうだよ。俺も手ぶらで巣に戻っている自分の姿が想像できない。手ぶらじゃ、門兵は腰を抜かして失神するだろうね。前代未聞だから。でもお頭を説得できるかい？ 横取りよこどりして生計を立てている悪党だよ」

すると、兄ちゃん蟻は腑に落ちないという声で言い返します。

「蟻ンコが本能をなくして、賊ずになつたくらいだから、よほどの理由があるのかもしれない。本能は一代や二代では廃すたれないはずだ」

「何か理由わけアリ(蟻)か？ そういえば、お頭は右肢みぎあしが不自由ふじゆうみたいだったなあ。逃げるときもこつちへ突進して来るときも引きずるよう

にしていた。それで往復ともビリだった。息もきれて苦しそうだつた。そのあたりの事情を訊いてみるかい？ 兄ちゃん」

「よし」と言つて、兄ちゃん蟻は恐る恐るお頭に近づきます。

「決まったか!? 時間をとらせやがつて。お宝をよこしな。へっへっへっ」

「いえ、まだ決めたわけじゃありません。その前によろしかったら教えてください。お頭さん。お見受けしたところ前脚が一本不自由なようですが、どうかされましたか?」

一瞬、お頭は眉間に深い皺を寄せ、思わず左肢で右肢の第二関節をいたわるように押さえます。

「何でえ、何でえ。俺様の古傷を突こうつて魂胆かい?」

「いえ、そうじゃありません。何かのお役に立てることがあるかと思ひまして。それにわたしたちだつていつ怪我をするかもしれませんので、向学のために、ぜひ教えて欲しいのですよ」

「うくん。どうせお宝はいただくことだし、しょうがねえ、教えてやるよ。野郎ども、俺様の目のとどかない所へ行つてろ!」

と、お頭は子分たちを遠くへ追いやり、少し寂しげに瞬きしてから話します。

「これは靴底にやられたのよ。忘れもしねえ、忘れられねえ、いや、忘れちゃいけない。あの日は最悪だった。アブラ虫のお宝を独力で運んでいたので。そうしたら、突然、いつもよりも大きな靴底が降つてきやがつた。二十九・五というサイズ印が目飛び込んできた。とつさに身体を丸めてかわしたさ。しかし、右肢の下に石ころがありやがつて、挟まれちまつたのよ。もっと運が悪かつたのは、人間は踏んづけたまま靴を半回転させやがつたのさ。そのため複雑怪奇骨折しちまつた。医者に診てもらふ錢もなく、そのまま放つておいたら痛みだけ

はなくなつたが、関節がうまく動かなくなつてしまった。普段ならフエロモンを発して仲間へ危険を知らせりや、すぐに駆けつけて来て助けてくれたのだから、俺はお宝を独力で女王様に献上したかつたんだ。それで緊急信号を発しなかつたのさ。傷口を早く仲間に舐めてもらつていりやあ、こんな肢になることもなかつたらうに。それ以降、

不猟の連続よ。お宝を引っぱるにも右肢に力が入らない。挙句の果てに、女王様からは破門同然の扱いを受け、どれほど惨めだつたことか。お若い、お前さん方には分かんねえだらうな? くうくうくう。生き

がいもなくしちまつたのさ。蟻が女王様に目を掛けてもらえないのだから。蟻を廃業しろ、と言われていようなものじゃないか。そうなり

や、幼馴染も離れていくし、狩の仲間になつてくれるものもいなくなつてしまつた。知つてのとおり、俺たち蟻はその二割が一生懸命働き、

六割が普通に働き、残りの二割はまったく働かない。そこで働かないでいる若いやつらを手なずけて、こんな稼業をはじめたのさ。どうやつて女王様のご機嫌をとればいいつていうのだ。俺には信頼できる仲間はいないのだよ。くうくうくう。俺にも女王様に褒められたいとい

う本能の欠けらは残つていよう。でも、こうするしか手段はないのさ。生きていことが辛くなる時だつてある。くうくうくう。さあ、これで事情は分かつたろ。話したのは初めてだ。子分たちの耳にも入れたことはない。分かつたら、お宝を置いてとつとつと行け。また余計な時間をとらせやがつて。こんちくしょう」

事情の分かつた兄ちゃん蟻は元氣よく答えます。

「そんなことがあつたのですか。とんだ災難、いや事故ですね。でもお頭、信頼できる仲間がないつて、おっしゃいましたが、ちゃんといるじゃないですか」

「ほざくな! そんなヤツはどこにもいない! いないのだよ、こ

んな俺には。くうくうくう」

「そんなあ、泣かなくてもいいでしょ。仲間はいますよ。だって、さつき靴底に踏み潰されそうになったとき、お頭が、おつと、左によれ！ おお、お、右だ！」 っって声を掛けてくれて、あの攻撃を逃れましたよね。お頭のあの掛声がなかったら、わたしたちはきつと潰されてましたよ。お互いに助け合ったじゃないですか。これって仲間じゃないですか？ 仲間だから声を掛け合っただけですよ」

兄ちゃん蟻はそう言っただけから、ちらつと弟蟻を見ます。

弟蟻も援護します。

「そうですね。お頭さん。仲間がいたから、わたしたちは仲間だから、助けたでしょ」

「……」

「聞いてますかあ？ 聞こえてますかあ？ おうい。お頭さん」

「……」

「呼んでるのですよ。わたしがあなたを。鼓膜に声が届いたら返事をしてください。どうかしましたかあ？」

「くうくうくう。うるさい野郎だぜ。ちゃんと聞こえてらあ。聴力だけは蟻一倍いいのだ。年寄り扱いすんじゃないえ」

「安心しました。ぼくとしていたようなので、耳が遠いのかな？ と勘違いするところだったですよ。よく見てください。わたしたちの姿も大きさもほぼ同じですよ。顔はわたしの方がイケメンですけど。巣穴の位置と女王様が違うだけで、わたしたちはハチを祖先とするハチ目・アリ科・ヤマアリ亜科・オオアリ属に分類されるクロ蟻族ですよ。お頭も子分たちもミミズや昆虫の死骸を主食とする雑食性ですよ。お宝を巣へ持ち帰って仲間に分け与える習性もあるでしょ。よく、見比べてくださいよ。ほれ、仲間ですって。こんなことで争って

仲間を失うことはないでしょ」

弟蟻は快活に話します。

こう諭されたお頭は腕組して少し首を傾げ両眼を深く瞑り、しばらく思索してから何かが閃いたというようにカッと両眼を見開き、答えます。

「そういうあ、身体全体が黒くて、身長もほぼ同じだな。手肘も同じ形、同じ大きさだ。顔の造作ぞうさくについてちゃあ、お前さんたちには負けていないけどな。へっへっへっ。確かに、雑食で積極的に蜜を探して歩くことはないね。お宝も仲間たちと分け合っただけ一緒に食べるときが楽しい。俺たちの先祖がハチだったことは親父から聞いたことがある……。そっかあそっかあ。俺は自分の無二の仲間に対して悪さを働いていたのか。自分の不幸を仲間に押し付けていたのかあ。お宝を盗み取っているかもしれないねえなあ。すまんことをしてきたものだ」

「そうですね。同じクロオオ蟻ですよ。仲良くしましょう。さあ、握手、握手！」

兄弟蟻はお頭の手を強く握ります。

お頭は何か憑よき物が消え失せたかのように従順になり、賊から足を洗うことを宣言します。そして、兄弟蟻は今後、お頭が見つけたお宝が巣穴からどんなに遠くても、必ず駆けつけ、それがどんなに重くても巣穴の入口まで運搬する作業を手伝うことを固く約束します。飛び切りのお宝を献上すれば、お頭もふたたび、女王様から寵愛ちゆうあいを受けることでしょう。

さて、仲間であることを確認し合ったお頭と蟻ンコ兄弟は小さな脳

ミソをフル回転させて人間と自分たちとの関係を話しはじめます。なぜなら、考えて行動を選択することの大切さを理解したからです。お頭のような不幸な蟻シコにならないためには人間にも理解してもらわなければなりません。

腑に落ちないという顔をして、お頭が口を開きます。

「人間ってのは、どうして、こうも俺たちを毛嫌いするのかなあ？ 木造住宅を喰ってしまうシロ蟻とは違い、俺たちクロオオ蟻はもつと善良な生き物なのだがなあ。それに俺たちはこのシロ蟻を栄養源にもしている。害虫退治をしてるってわけだが……、この貢献については余り知られていないようだな」

続いて、弟蟻が話します。

「わたしたちを見つけると、すぐに全滅させようとしていますよね。先日も子供たちが巣穴へホースの先を突っ込み、これで喰らえ」って叫んで、水道の栓を全開にして水を注入しやがった。そのため食料庫も罅もゲリラ豪雨の後のように水浸しで、女王様もゆったり寝ていられたかった。ベッドごと別室へお運びするのが一苦勞だったですよ。畑の端っこの巣穴は先の尖った農具でひっかき回され、生まれたばかりの卵を天日干しにされちまったこともある。巣穴の近くにだけは野菜の種を播くな、と言いたいですよ。芽が出ないと、わたしたちがわざと巣に運んだように思われてますよ。目の前にある食料をただ運んでいるだけで、わたしたちには罪の意識はまったくないですよ」

さらに、兄ちゃん蟻は人間が仕掛けてくる攻撃の残酷さに激怒します。

「踏み潰す時間を節約しようと人間たちは、俺たちがお宝を巣へ持って帰り、仲間に分け与える習性のあることを逆手にとって、蟻の巣コロリなんていう毒饅頭を作りやがった。この化学兵器は粒状の他に、

エアゾールタイプと液体タイプとがあって容赦なく散布するものだから全滅した巣穴もあるようです。巣の外にいる仲間たちはほんの一部で、大部分が巣の中で働いているから、その仲間たちが皆殺しにされている。まるでテロリストのようだ。国連を通じて化学兵器の使用禁止を訴えたいです」

うんうんと頷いているお頭は解決策を探ろうとします。

「俺たちって、そんなに邪魔者か？ 靴のサイズは分かるが、人間の言葉が理解できないからなあ。どうしようもない。生きていくうえで俺たちと人間は共存共栄できないのか？ 俺たちが人間にとって役に立っていることは何かないのか？」

じつとお頭の目を見て聞いている兄ちゃん蟻が答えます。

「そうですね。職業という点からすると、わたしたちは静脈産業の担い手ですよ」

「何だ。その、じょう・みやく・さん・ぎょう、つてのは？」

お頭は不思議そうに訊き返します。

「たとえばですね、蜜蜂は蜜を生産しますよね。蜜のように何かを作る仕事を動脈産業と呼びます。役目を終った蜜蜂の死骸、ミミズやその他の昆虫の死骸をこの地上からきれいさっぱりと処理する仕事を静脈産業と呼んでいます。俗っぽく言えば、地上の衛生環境を維持する掃除屋の役割をしているわけです。廃棄物処理業者ともいいます。格好良く言えば、この地球の環境を救って、良好に維持しているのですよ。これらの仕事は人間にも役に立っているはずですよ。胸をはって、堂々と生き抜きましょう」

「なるほどね。掃除屋なら分かりやすいやあ。こんな姿形をしちやいるが、役に立ってる、つてことだ。一寸の虫にも五分の魂。人間から悪さをされる根拠もないつてことだな」

「そうですよ。そのとおりです」

蟻ンコ兄弟は声を合わせて答えます。

「言葉が理解できればなあ、人間に訊いてみたいけど、こりや無理だな。はっはっはっ」ここでお頭は身体をぶつるぶつると振るわせ、一息ついてから「あくあ、ずい分と長い時間、話し込んだねえ。空も薄暗くなって、気温が下がりはじめた。今日はずいぶん迷惑をかけたので、このふやけてしまったミミズを巣穴の入口まで運ぶのを手伝わせてくれ。この程度じゃあ、罪滅ぼしにもならないかもしれないがね。おゝい！ 野郎ども！ どこへ行きやがった。早くこっちへ来て、お手伝いしろ！ 蟻らしく。へっへっへっ」

そう言うと、照れくさそうに目尻を下げて笑います。

(了)

**付記。**地球上に存在する生命体どうしは互いにつながり合って、その小さな命を生かしています。この作品のモチーフは、小さな蟻も自分と他者の命の源である環境を良好に維持する役割をしていることを伝えることです。

人間に限らず、蟻も集団（社会）生活をしている昆虫の一つです。集団から孤立すると、死期が早まるそうです。一方、集団で活動したり、その中で幼虫の世話をするものは長生きするそうです。誰かに必要とされる存在であったり、生きがいを持つこと、と寿命の長さとは強い相関関係があるようです。この現象は他人事ではありません。人間にも当てはまりそうです。社会的つながりの少なさからくる孤立感やストレスとなって、体内で炎症反応を起こし、脳卒中や肺炎などの発病確率を高めるそうです。

情報通信技術（SNS）がどんなに発展しても、それは孤立感を癒す一時のつながり手段にすぎません。生身の人間である限り、泥臭い係わり合いが小さな命を輝かせるでしょう。

ところで、本文にもあったように同種の蟻であっても巣が違えば赤の他人であり、敵であり、ときには壮絶な戦いもするようです。この排他性は社会性のある昆虫の大きな特徴だと言われています。争いを避けるために縄張り

(八)

がありますが、それが互いに重なる戦いが生じます。この戦いは、公園でもしばしば目にする事ができます。その戦闘員はクロオオ蟻やトビイロシワ蟻たちです（丸山、二〇一四、一六三頁参照）。

**参考文献。**

朝日新聞社 *The Asahi Shinbun GLOBE, January 2020, No. 225, p. 05.*

稲垣栄洋（二〇一九）「餌にたどりつくまでの長い危険な道のり」「卵を産めなくなった女王アリの最期」「生き物の死にさま」草思社、一〇九～一一五頁、一一六～一二二頁所収。

丸山宗利（二〇一四）『昆虫はすごい』光文社新書。

村上貴弘（二〇二〇）『アリ語で寝言を言いました』扶桑社新書。

## 二．庭木たち

— 高さ一メートルほどのブロック塀を挟んで両隣の庭に木々が植わっている。塀の近くの右にいる五葉松ごようまつの枝は伸び放題、左にいるオンコオンコ（イチイ）は円錐のごとく綺麗きれいに剪定せんていされている。

「松さん。こんにちは」

「やあ、オンコ君、こんにちは」

「これまで、仲良くしてくれてありがとう」

「んんっ？ どうかしたの？ なんか、しんみりしちゃってえ」

「実は、もう少しすると、僕は死んじゃうんだよ」

「えーっ!? 冗談はやめてよー」

「冗談じゃあないよ。本当だよ」

「どうしてさあ!? 元氣そうじゃないか?」

「外見はね」

「緑色の葉っぱのツヤもいいし。いつもと変わらないよ。害虫にどこかを齧られたの？」

「いいや。でも、心はずたずたに切り裂かれているけどね」

「どうしたの？ どんな事情があるの？ 教えてよ」

「うん。この家の老夫婦が亡くなって、近所に住んでいる息子がこの土地を不動産屋へ売るそうなんだ」

「えっ？ 君のご主人、亡くなったの？」

「うん。亡くなった。ご夫婦とも」

「そっかあ。お爺さんは春になると、脚立を立てて、君によく鉢を入っていたよね。きれいに散髪をもらってえ、僕はそんな君がちょっと羨ましかったんだけどなあ」

「うん。でも、もう散髪もしてもらえないし……。松さんとは、二十五年くらいの付き合いだった」

「あゝあ。もう、そんなになるかあ」

「そうだよ。僕は、ちっちゃな苗のときに、ここに植えられてからの塀の向こうにはどんな友達に住んでいるのかなって、ずくずくと想像していたもの。毎日、首を伸ばして、伸ばして、十年かけて、ようやく松さんのいる庭を見ることができくらいにまで大きくなったんだよ」

「そうそう。塀もあるし、こっちの土地がちよつとだけ高いからね」

僕も、君が一生懸命、背伸びをしている姿を想像していたんだよ。君の頭のとっぺんが、ちよこつと見えたときは僕も感動しちゃったよ。

よく、頑張ったなーって」

「ありがとう。お互いに顔が見えるようになってからは、よく話をしたよね」

「したした」

「僕のお爺さんは几帳面でよく手入れをしてくれたけど、松さんのご主人は自由気ままに生きることを尊重してくれて、枝なんて、あっちこっちと伸び放題だよね」

「うん。自由だよ。好きなだけ伸びている。ありがたいことだよ」

「何年前には、枝に山鳩が巣を作ったこともあったし。クークーって鳴いて」

「あつたあつた。雛をどこかのごろつき猫に食べられるんじゃないかって、心配したよね」

「したした」

「でも、猫に狙われないよう、ご主人が巣を上手に枝で隠してくれてえ、無事に巣立ったんだ」

「あれには感激したよ。思わず、もらい泣きしたよねえ」

「したした。野放図なようで、僕のご主人は心根の優しい方だから、庭に生える草たちのことは雑草なんて呼ばないよ」

「なんて呼ぶの？」

「うん。庭草だよ。自分の庭に芽を出してくれたものはみんな貴いものだから雑なんて言葉は使わないのさ。もともと雑草なんて名前の草はないから」

「なるほどお。ないよね。優しいねえ」

「うん。だから草だって、簡単には抜かないんだよ」

「へへ、そうなんだあ」

「だって、どんな草も小さな虫たちの罠だからさ。秋になると、その中でコオロギやキリギリスたちがオーケストラのように音を奏でるだろ。ご主人は、それを聴くのを楽しみにしているからね。決して、抜かないし、除草剤なんて絶対に撒かない」

「優しいんだものねえ。あつ。雀たちだね。チュンチュンと鳴いて、

「今日も元気だね」

「サクランボの枝で挨拶をしているんだ。『元気かい？ わーい、わーい。なにをして遊ぶのかあ？』って」

「そうだろうね。可愛い声だよ。心が和むよ。……他のモミジも、ライラックも元気そうだね」

「うん。みんな元気、元気。ちよつと離れていて、ここからじゃ話ができないけど。あの笑顔は最高さ。そら、噂をしたから、モミジとライラックが大きく揺れたよ。クシャミをしたんだ」

「あーあ。ライラックの薄紅色の花を見るのも今年が最後だ」

「えっ？ どうかしたの？」

「だから、この土地を売るために、更地にするそうさ。花も庭木たちもみんな抜かれちゃうのさ。殺されてしまうってわけ！」

「殺されるって!!」

「そう、殺されるの」

「……??」

「人間は、なぜこうも身勝手なんだろうね？ だって、そうさ。僕たちを必要として、植えたくせに、要らないとなると、根こそぎ抜いてしまうんだ。小さな産毛みたいな根まで抜くそうさ。二度と芽が出てこないように」

「そつそれじゃ、僕も死んじゃうよ。だって、僕たちは群れて、助け合って生きているよ。近くにある仲間の根から糖分を分け合うことだってあるじゃない」

「そうだね。一本だけ植わっていても他に頼る仲間がいないと、長く生きられない」

「そつかあ。どんな物にも命が宿っているの……。僕たちの命も人間の命も尊さは同じなの……」

(10)

「うん。みんな生まれながらにして、生きる権利、生命権を持っているのね」

「生命権？ そう、そうだよ！ 生命権だよ！」

「だろ」

「君が抜かれてしまうことが、もし本当なら僕もまったくそう思うよ。人間は自分勝手だって。自分勝手って言えば、この塀だって、僕の主人が住む前に造られてえ、君が来るはるか前だよ」

「じゃまだよね」

「そう、じゃま。僕たちの葉っぱがお互いの庭に落ちるのを嫌って、両家で費用を折半して造ったんだ」

「へっ。そうだったの。塀を造るから、もつと高くて強固な壁が心に造られちゃうんだよ」

「そうさあ。そのとおりだよ。……ああ、話がそれちゃってごめん。更地にするなんて……今は、僕たちを抜くんじゃなくてえ、もつとつと植えなきやいけない時代になつちやてるのに。人間は……」

「そうそう、そうだよ。僕たちは人間が出すCO<sub>2</sub>を吸って、きれいな空気に変えてあげているのね」

「僕たちの葉っぱは、いうなれば天然の空気清浄機だよ」

「そのとおり。秋になると赤や黄色に色づいて、落ちた葉っぱは汚い空気を吸った仲間たちの亡骸なきがらだよ。でも人間は紅葉こうようがきれいだなんで、勝手なこと言ってる。何も解つちやいない」

「地球の温暖化を抑止しなきゃいけないって盛んに言っているくせに、僕たちを増やすんじゃなくて、伐って、抜いて減らしている。人間は自分で自分の首を絞めていることに、まだ気づいていないようだ」

「違うよ。とつと気づいているのさ。気づいていても個人個人が自分の問題として受け止めていないのさ。自然なんて放つておいても、

なんとかなるだろうって」

「うん。それじゃあ、単なる傲慢ごうまんだよ」

「ごめん。自分の問題として考えられる人間が少ないってことを言いたかったんだ」

「そうだよね。少なすぎるんだよ。人間も自然の中の小さな生き物なのね。自然にはどうしたって敵かたいっこないのに……」

「そうそう。人間はカレンダーを見ないと春なのか、夏なのか、解らないみたいだけど、僕たちは簡単に解るよね」

「うん。時間だって、そうさ。人間は時計を見ないと解らないけど、僕たちは朝か昼か夕方かなんて、わけなく解るよね」

「解る解る」

「人間は自然を壊して生活を便利にしているように思っているようだけれどねえ」

「逆だよ。生活が多少不便になっても自然を重視しなきゃいけない状況だよ。未来の人間たちにこのきれいな空気を残していかなきゃねえ。ほんと呆れてモノも言えないよお」

「まったく同感だよ」

「それにさあ、人間は自然との共生という言葉を使いたがるよね」

「うん。でも、本来の意味をはき違えている。どうやら人間は自然をコントロールできる多少の余裕があるから、自然を守ってやるという意味で使っているもの。『地球にやさしい』とか『緑豊かな環境を』という決まり文句を聞くたびにそう思うよ」

「そのとおり。人間は僕たち自然から多くの利益を受け取ってきた。しかし、僕たちは人間から何も利益を受けていない。僕たちは使われ、壊されるばかりさ。これは共生じゃない」

「自然に手をつけないで、踏み込まないで、放っておいてもらえるの

が一番いいんだけどね」

「繰り返すけど、人間も自然の一部だのね」

「いつの間にか人間は自分たちを自然の外側にいるものとして捉えてきた」

「それで、自然と距離をとってコントロールしようとしてきた」

「自然災害が発生すると『想定外』という表現がよく使われたよね」

「津波や暴風雨雪ね」

「自然を思い通りにできるという前提で行動していたからだよ」

「あーあ。こんな愚痴をこぼしても、もうすぐ根っこから抜かれてしまうんだあ。松さんとは朽ち果てるまで友達でいられると思っていたのに……ありがとう。感謝するよ。いい人生だった」

「でも、抜かれても、またどこかの庭に植えてもらえるんじゃないの?」

「(怒気) だめさー?? 燃やされるんだよ! ゴミと一緒に……。高温でポウ、ポウって」

「えーっ? そんなことないだろ。君は枝ぶりもきれいだから、きつとどこかの誰かが……。ねえ、畑の横を見てごらん。白と赤のツツジがいるだろ。あの木たちは、僕のご主人がここに住みはじめたときに、裏のご夫婦からいただいて移植された木たちだよ。毎年、雪囲いをしてもらって、大事に育ててくれたからあんなに大きくなった。道路側にも、ボケがあるだろ。あの木なんて、家の西側のブロック塀の下にあつて、日陰物だったんだ。それをご主人が今の場所に移植したんだ。伸び伸びと大きく育っているだろ」

「うん。僕よりも大きいね」

「だろ。あの場所に来てから、ぐーぐー、と伸びたから」

「松さんのご主人はとっても優しいんだものね」

「そう、とつてもとつても優しいよ。ご主人は自分には関係がないと

思われるような不幸な出来事に対しても責任を感じる方だよ。みんなつながっている、という考えを持っているんだ。……だからね、この庭にいる僕を含めて、他の木たちもご主人の前の住人が育ててくれたものをそっくり残してくれたのさ。家を新築したときだって、伐られたり、抜かれた木は一本もないからね。ここにいる木はみんな家族だよ」

「そんな優しいご主人の庭にずいっといられる松さんに嫉妬しつとしてしまふよ。でも、そんな優しい気持ち、心ってどこから生まれるのだからねえ」

「うん。ちょっと難しく言うけどね、人がこの世に生まれて来て一生の伴侶とするものは、あなたが人間同士だけではなくて、山河、住家、それに伴う木や草のたぐいまでもがそうであるという考えを持っているんだよ」

「ふん。難しいね」

「それにね、ご主人は読書が大好きで、たくさん本を買って読むんだけど、本は紙からできているだろ。その紙は木からできているじゃない。だから、いつも木に感謝しているのさ。読書を楽しませてくれるのは、木だって。……もっと言うと、色んな本を読んで知識が豊富だから、身の回りの生き物だけでなく、人間が造った物にも命というか、魂が宿っているという考えができる方なんだよ。多様性を許容するという精神だね。これだと解るだろ」

「うんうん。解るよ。なるほどね。その考えは正しいよ。人間は気づいていないようだけど、実は、僕たちは常に人間の営みを観ているよね」

「観てる、観てる。毎日、道路を行き交う人間の表情だって観ているよ」

「……でもなあ、燃やされちゃうから。燃やさないで……せめて郷里へ返してくれるといいんだけどなあ」

「郷里。そうだよ。たとえば抜かれても、祖先のいる森へ返して欲しいよ。庭木はみんなそう思っている。好きす好このんで、庭木になったわけじゃないし、ね。最後は郷里へ帰りたいって」

(一一)

「……もともと人間だって森の中で生きていたのにね」

「帰りたいよね」

「あゝあ。それも叶わぬ夢。ポウーっと」

「うん。なんとかならないかなあ」

「あゝあ」

「……オンコ君。ちょよ、ちょっと待ってよ。まだあきらめちゃあ、いけないよ。僕たちは生きるために生まれてきたのだから。さっきの生命権だよ。生きるんだよ。色んな人間がいるから……」

「いても助けてくれないよ。身勝手だから」

「そんなことないって！ 優しい人がいて、きつと助けてくれるって。だからさあ、あきらめないでよ」

「ありがとう。そんな希望を抱かせてくれて、励ましてくれるのも松さんだけだよ。でも、もういいんだあ。僕は、この塀を上回って大きく伸びることができて、松さんという友達と長年、楽しく生きてこられたから。それだけでも十分に幸せだったよ」

「だめ、だめだよ！ そんな弱気じゃー！」

「でもね、三日後にはこの家を壊して、花も庭木たちも全部抜いて、更地にするって、息子が土建屋と話していたもの。あの息子じゃあ……優しくないから、助けてくれないよ。もう、無理だよ」

「どうしよう、どうしよう。あゝあ、なんとかしなくちゃあ。なんとかあ……」

――重機を使って、花も庭木も掘り起こされた。

……

「そのオンコとモミジ、それからスズランとミヤコワスレの株をも  
らえませんか。捨てるのであれば、うちにくれませんか。育てます  
から」

……

「オンコ君。おはよう。今日もいい天気だね。チュンチュンが鳴いて  
いるね」

「松さん。おはよう。鳴いている、鳴いている。風も爽やかだね、  
心地いいね」

「うんうん、爽やか、爽やか、心地いい」

(了)

**付記。** 私は自宅の二階の窓から隣の屋敷が更地にされる作業をぼんやりと眺  
めていた。樹齢五十年になる栗の木はわずか一分で伐り倒された。悪魔のよ  
うなユンボは、庭木たちをいとも簡単に掘り起こしていく。悪魔は境界に建  
てられたブロック塀の近くにあるオンコへと進む。きれいな円錐形に剪定さ  
れたオンコ。

悪魔はその根元に切っ先を入れる。グオーングオーン。そのときドッドッ  
つと、大きな音とともに家屋が揺れた。それはまるでオンコが抜かれるのを  
嫌がって、すべての毛根で土に強く、固く噛み付き、「抜かれないぞ!」と  
抗<sup>あらが</sup>っている叫びのように聞こえた。物言わぬオンコも生きている、生きた  
いのだ。そんなことを幹、枝葉を打ち震わせて必死の思いで訴えているよう  
に感じた。

「なんてことを……」

私の胸に熱いものがこみ上げてきた。

次の瞬間、階段を足早に駆け下りてきた。

庭木たちをなんとか救ってあげたい。その生命をいとおしむ気持ちは優し  
さと責任感をかき立てて止まない。

「みんなつながっているんだ!」

参考文献。

『朝日新聞』(二〇二〇)「砂澤ビッキ「フクロウ」倒壊 倒れ、朽ちるのも  
また芸術 作品は永遠に」六月四日。

『朝日新聞』(二〇二〇)「木のお医者さんってこんな人」八月十九日。

『朝日新聞』(二〇二〇)「ビッキ「フクロウ」倒壊の翼記念館へ」十二月四日。

安野光雄(二〇〇九)『もりのえほん』福音館書店。

小川未明(二〇一五)『あらしの前の木と鳥の会話』『小川未明童話集』岩波  
文庫、二〇四〜二一四頁所収。

小山田浩子(二〇一八)『広い庭』『庭』新潮社、一四一〜一六四頁所収。

長田弘(二〇〇六)『人はかつて樹だった』みずす書房。

長田弘(二〇〇七)『空と樹と』エクリ。

長田弘(二〇一八)『おおきな木』『深呼吸の必要』ハルキ文庫、六六〜六七  
頁所収。

甲斐信枝(二〇二二)『雑草のくらし あき地の五年間』福音館書店。

鏑木清方(二〇一八)『庭樹』千葉俊二ほか編『日本近代随筆選 2 大地の声』  
岩波文庫、一五四〜一六一頁所収。

高田宏(一九九三)『木に会う』新潮社。

手塚治虫(二〇二〇)『山の彼方の空紅く』『モモンガのムサ』『手塚治虫の山』  
ヤマケイ文庫、六九〜一〇〇頁、一〇一〜一五八頁所収。

中村桂子(二〇二二)『耕論』自然の一部』立ち戻ろう』朝日新聞二月十一日。

彩図社文芸部編纂(二〇一七)『木』『老楓』『りこうな桜んぼ』『木』『金子みずゞ  
名詩集』彩図社、六二〜六三頁、一一六〜一一七頁、一二〇〜一二二頁、  
一三八〜一三九頁所収。

佐治晴夫(二〇一八)『木』『暦と時計』『土と草』『詩人のための宇宙授業  
金子みずゞの詩をめぐる夜想曲逍遥』JULA出版局、三二〜三三頁、  
六八〜六九頁、八〇〜八一頁所収。

西岡常一(一九九二)『木に学べ』小学館ライブラリー。

長谷川莞(一九九三)『生きものの建築学』講談社学術文庫。

平山和子・平山英三(二〇〇一)『落ち葉』『月刊 たくさんのふしぎ』通巻  
二〇〇号、福音館書店。

辺見庸(二〇二〇)『森と言葉』和田博文編『森の文学館 緑の記憶の物語』  
ちくま文庫、五三〜六三頁所収。

- まど・みちお(二〇一五)『無限』『どんな小さなものでも みつめていると宇宙につながっている』新潮社、一〇〇〜一一七頁所収。
- まど・みちお(二〇一七)『よかったなあ』、『コオロギ』、『ページ』、『木の字たち』(谷川俊太郎編)『まど・みちお詩集』岩波文庫、二七一〜二七二頁、一六六〜一六七頁、二二二〜二二三頁、二四二頁所収。
- まど・みちお(二〇二〇)『いわずにおれない』集英社文庫、一五四頁参照。
- 宮崎駿(二〇二〇)『森の持つ根源的な力は人間の心の中にも生きている―』『もののけ姫』の演出を語る』和田博文編『森の文学館 緑の記憶の物語』ちくま文庫、一三七〜一五五頁所収。
- 安田喜憲(一九九七)『森を守る文明 支配する文明』PHP新書。
- K・S・シュラバー(松永美穂訳)(二〇二二)『気温が1度上がると、どうなる?―気候変動のしくみ』西村書店。
- シヨーン・タン(岸本佐知子訳)(二〇二〇)『内なる街から来た話』河出書房新社。
- レオ・パスカーリア(みらいなな訳)(一九九八)『葉っぱのフレディー―いのちの旅』童話屋。
- ペータ・ヴォールレーベン(長谷川圭訳)(二〇二二)『樹木たちの知られざる生活 森林管理官が聴いた森の声』ハヤカワ文庫NF。
- ポール・ナース(竹内薫訳)(二〇二二)『What is Life(ホワットイズライフ)』ダイヤモンド社。

